ISSN 0912-7402

臨時号：2024年11月

NEWSLETTER

～ 水を守り　湖を救う ～

公益財団法人　国際湖沼環境委員会（ILEC）
本ニュースレターには、英語版もございます。

～持続可能な湖沼管理の推進：共に創る未来

2024年9月25日（水）～ 28日（土）

ILECは近年、持続可能な湖沼管理（SLM）の推進に向けて、多様なステークホルダーと連携し、次世代リーダーの育成に取り組んでいます。今年度は、若手政治家、研究者、学生など6か国のユースが「SLM Week ～持続可能な湖沼管理の推進：共に創る未来」に参加しました。

北米やアフリカで20年以上にわたり環境保護活動や教育プログラムの戦略アドバイザーを務めるステファニー・スミス氏をファシリテーターとして迎え、３日間、琵琶湖・淀川流域でエコツーリズムや市民活動を体験しました。その体験を自身の研究や取組に関連づけて、その後のワークショップでILEC科学委員から助言を受けながら、アクションプランを作成しました。最終日には、SLMフォーラムでこのプランを発表し、さらなる若者の参画を呼びかけました。

今回のイベントに引き続き来年は、ユース活動の成果や進捗を発信するためのプラットフォーム“Lakes for Life”を立ち上げ、2025年7月にオーストラリア・ブリスベンで開催する第20回世界湖沼会議（WLC20）においてお披露目する予定です。

なお、本イベントは日本万国博覧会記念基金の助成を受け実施しました。

DAY 1

9月25日

- ワークショップ
- フィールドトリップ

ILECに集結

日本、メキシコ、オーストラリア、フィリピン、ハンガリー、ウガンダから、ユース10名が集まり、エコツーリズムやごみアプリ活用など、それぞれの研究や活動を発表しました。また、ファシリテーターや科学委員からのアドバイスを受けながら、WLC20でのユースの活動参画を呼びかける方法を話しあいました。

琵琶湖博物館 & 琵琶湖クルーズ

琵琶湖の生態系や環境保全の取組の歴史など、活動や取組のヒントを探しに琵琶湖博物館へ。その後、遊覧船「一番丸」に乗船しました。船上では、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）所属の学生たちが、クイズ形式で歴史やツーリズム、湖上交通、えり漁の仕組などを紹介し、琵琶湖を案内しました。

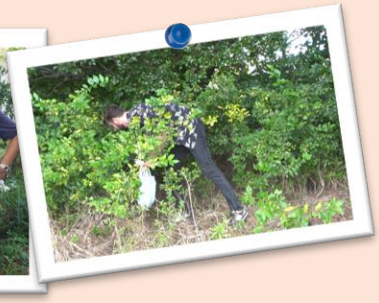
目田（めた）レンジャーとの交流

日本の市民活動事例として、NPO法人びわこ豊穣の郷が実施する「目田川モデル河川づくり」を調査しました。このプロジェクトでは、滋賀県守山市を流れる目田川にホタルが自生するよう、清掃活動やホタルの放流などの環境保全活動が行われています。活動に参加する小中学生の団体「目田レンジャー」がその活動を紹介し、ユースたちと各国の事例について質疑応答を通じて交流しました。

DAY 2

9月26日

- ワークショップ
- フィールドトリップ



ILBMの６本柱

統合的湖沼流域管理（ILBM）の６つの要素（組織・体制、政策、参加、技術、情報、財政）について、グループに分かれて、ユースがどのように貢献できるかを話し合いました。

アクア琵琶 & 瀬田の洗堰

瀬田の洗堰は、洪水を防ぐ、水質を守る、水資源を管理する、そして地域の自然環境を保護する等、重要な役割を担っています。アクア琵琶では、ビデオで治水の歴史や現状を学び、滋賀県の環境保全における森林再生の重要な地域である田上山を一望できる三階の展示室を見学しました。

「ごみマップ」アプリ実践

同志社大学経済学部の原田禎夫准教授が開発した「ごみマップ」アプリを使用し、淀川河川敷で同准教授の指導のもと、プラスチックごみが引き起こす環境汚染について調査しました。このアプリは、簡単な登録作業で地域のごみの分布や種類、環境汚染の状況を可視化でき、地域コミュニティの環境保護活動やごみ問題解決に役立ちます。

DAY 3

9月27日

- フィールドトリップ
- フォーラム準備

たどるを楽しむエコツーリズム

2022年に開催した「湖沼のエコツーリズムコンテスト」で最優秀賞に輝いた成安造形大学の学生が提案したプランを実際に体験しました。地元の漁師や建築家、農家等多様なローカルキュレーター（地域の専門家）が独自の視点で大津市守山地区の自然を案内しました。「川の音の違いにより天気や災害などの予測がつく。」といった、地区居住者ならではのお話が聞けました。

ローカルキュレーターのお話 ～蓬莱の家にて

地元の漁師からは、魚の産卵には、琵琶湖だけでなく川や水田の環境も重要であるというお話を聞きました。また、一般社団法人シガーシガからは、蓬莱の家を拠点にカフェ運営やマルシェを通じて地域交流を促進し、移住者へのサポートを行っているという活動紹介がありました。

SLMフォーラムの準備とバスキ元大臣からの激励

自身の研究や活動を基に、3日間のワークショップやフィールドトリップで学んだことや気づきを反映させながら、翌日のフォーラム発表準備を進めていました。そんな中、インドネシアの元公共事業・国民住宅大臣バスキ・ハディムルヨノ氏（写真前列中央）がILECを訪れ、湖沼環境保全に取り組むユースたちを激励しました。

DAY 4

9月28日

SLMフォーラム

パネルディスカッション

「湖沼は持続可能か？」

WLC20につながる議論を念頭に、開催地のオーストラリアをはじめ、過去の開催地であるインドネシア、メキシコ、米国、さらには国連環境計画（ケニア）、環境省、滋賀県、たねやCLUB HARIEより6か国8名の湖沼専門家等が、「水源から海へ」や「人材育成」、「世界湖沼デー」をテーマにディスカッションを展開しました。

円卓会議

「グローバルユースと考える持続可能な湖沼管理 ～WLC20に向けて」

SLMウィークに参加した6か国8名のユースに加え、オンライン参加者もそれぞれの研究や取組について発表しました。その後、今後のSLMの推進や、世界湖沼デーの制定に向けたアクションプラン※を発表し、更なるユースの参画を呼びかけました。

※アクションプランの内容は、次ページでご紹介しています。

SLMウィークの協力者

WLC19（ハンガリー）のユースセッションでリーダーを務めた立命館大学産業社会学部4年の窪園真那さんがSLMフォーラムの円卓会議でもMCを担当しました。また、アフリカ水生生物研究教育センター戦略顧問、ゼファー・マンガタ・コンサルティング代表のステファニー・スミス氏にはファシリテーターとしてご協力いただきました。

講評　－平安女学院大学国際観光学部　山本芳華教授

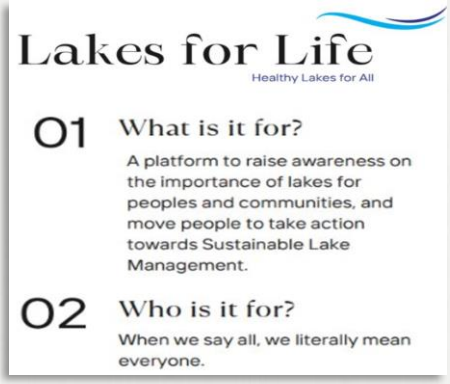
このユースの活動は、2022年のエコツーリズムコンテストからハンガリー、そして今年日本へとつながりました。この活動こそが重要な「プラットフォーム」であると言えます。20年後に「また戻ってきたい」と思えるような「場」（プラットフォーム）を作ることが、私たちの使命です。このプラットフォームは、ユースだけでなく、未来に向けて世代を超えて参加できる場となることで本当の意義を持ちます。

グローバルユースワークショップを受けたアクションプラン

- **オンラインプラットフォーム “Lakes for Life”を立ち上げる**
  - “Lakes for Life”を通じて、湖の保全活動を継続的に促進し、将来の湖沼保全活動の強力な基盤を築く
  - “Lakes for Life”プロジェクトへの参加者を募る

#キャンペーン

- **世界湖沼デーに合わせてグローバルアクションを起こす**
  - ➡ **世界湖沼デーキャンペーンを実施し、行動を促す**
- **2025年にブリスベンで開催される世界湖沼会議に向けてセッションを準備・実施する**



SLMフォーラムについては、登壇者それぞれの発表は
ビデオのリンク付きの概要 にてご覧いただけます。

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)

ILEC

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
— 事務局 — Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese